

城郭用語一覧

居城（きよじょう）

その領地の主が普段住んでいる城のこと。領主が拠点としている城のことを指す場合もある。戦国時代後期では、有事にも平時にも対応できるよう、居館と城郭が一体化した城が造られていた。

曲輪（くるわ）

建物や兵などを配置するために造られた空間のこと。曲輪の境界には通常、土塁や壁、柵などで囲いが造られる。こうした囲い状の構造物の他、出入り口の外側に土を盛って敵が一直線になかへ攻め込めないようにする馬出のように、防御用の壁として造られた囲いも曲輪と呼ぶことがある。

本丸（ほんまる）

本丸とは、ひとつの城において最重要かつ中心となる曲輪のこと。

大手（おおて）

ひとつの城の区域内へ踏み込むために設けられていたいくつかの入口のなかでも城の正面にあたる入口のこと。大手にある門は城へ入ろうとする者を威圧するために、巨石を置いた石垣で固めたり、大規模な櫓門を置いたりして堅牢な造りにされるのが一般的といわれる。

搦手（からめて）

城の裏手のこと。搦手にある門を「搦手門」と呼ぶ。これに対して、城の正面のことを「大手」といい、こちらには大手門が置かれる。地勢に特に問題がない場合、搦手は北方に、大手は南方に構えるのが一般的である。また、搦手門は城を守る側が戦で負けそうなときに、脱出を図るための出入り口としての役割もあったとされる。

切岸（きりぎし）

山地などの斜面の土を垂直に近い角度で削り落とし、人の手によって断崖絶壁とした構造のこと。特に山城などで、敵が容易に登って来られないようにその周囲に切岸を設けた例が多い。城の周りから城内を見ることが難しく、攻め手にとっては視界を遮られることにもなる。

虎口（こぐち）

曲輪の出入り口のこと。戦において虎口は、籠城する側からすると出撃口や物資の搬入口になるので、死守すべき場所になる。一方、城を攻める側からすると、敵の出撃や物資の補給を絶ちたいので、真っ先に攻め落とすべき場所になるのである。

城郭用語一覧

柵形（ますがた）

柵形とは、壁や土塁などで囲まれた空間を指す。防御力が高まることから、戦の際の主要な出入り口となる虎口に採用されていることが多く、虎口の形態としては最も発達した形式と考えられている。柵形の区画内には通常「一の門」「二の門」と呼ばれる2カ所の出入り口が設けられ、敵が城のなかへ一直線に進入できないように2つの門は直角方向の壁にあたり、位置を左右にずらしたり異なる方向に設けられる。

堀（ほり）

堀とは曲輪の周囲に掘られた溝のこと。敵が城に侵入するのを防ぐために造られた。

堅堀（たてぼり）

通常、城の堀は本丸など曲輪を取り囲む位置にめぐらされるが、堅堀は山城などにおいて山の上から下方向へ、縦に造られるのが特徴である。これにより、敵が斜面をつたって山上の曲輪へ押し寄せたり、山腹で横に移動したりするのを阻むのに役立つ。中世の山城では石垣がなく、防御用の施設として堅堀を造ることが多かった。

堀切（ほりきり）

山城で多く見られる防衛構造のひとつで、敵が尾根沿いを伝ってやって来るのを防止するために、尾根の方向に垂直に造る堀のことである。通り道が途中で遮断されるので、攻め手は進行が困難になる。

障子堀（しょうじぼり）

堀はなかに水をたたえた水堀と、水を入れない空堀に2分されるが、さらに形状を工夫した物もあった。なかでも障子堀は、堀の底を一部土手状に掘り残して区画した堀を意味する。まるで障子のふすまのように格子状の障害物が堀底に形成されているので、敵はその障害物を越えて進むことになり、守備側にとっては効率的に敵を攻撃することが可能になる。

馬出（うまだし）

曲輪の防御力を高めるために造られた構造物のひとつ。虎口の門の外に設けられる。

角馬出（かくうまだし）

馬出は様々な形状が考案され、角馬出は四角形にした曲輪の一部に狭い出入り口を設けた馬出である。

城郭用語一覧

櫓（やぐら）

敵の監視や攻撃、戦時物資の収蔵などの役割をかね備えた建物のこと。

横矢掛かり（よこやがかり）

側面からの攻撃を横矢と呼ぶが、城壁の一部を屈折させたり曲輪を設けたりして横矢をかけやすくするのが横矢掛りである。特に、戦闘の際の出入り口となる虎口に多く採用された。